

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：12608

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K06409

研究課題名(和文)旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)造営におけるフランス人室内装飾家の関与と日本趣味

研究課題名(英文)French Decorators' Contribution and Use of Japanese Motifs in the Design Process of the Former Crown Prince's Palace (Akasaka Palace)

研究代表者

平賀 あまな (HIRAGA, AMANA)

東京工業大学・環境・社会理工学院・特任准教授

研究者番号：90436270

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮)造営におけるフランス人室内装飾家の関与と日本趣味の導入について、アンリ・フルディノウ、ジョルジュ・エンシエルの2名の装飾家から意匠案の提案を受けていたこと、日本趣味の導入は造営当初から意図されており、手法は、提案された西洋の装飾の中に日本趣味の意匠を挿入するものであったこと、これらは日・欧・米の美術の粋を組み合わせるといふ片山東熊の基本方針を反映したものと考えられることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The Former Crown Prince's Palace (Akasaka Palace) was Japan's first Western-style palace constructed in 1909. Dr. Tokuma Katayama conducted the construction project as the head architect of the Imperial Household Ministry. The objective of this research is to understand the design process of the decoration by analyzing the documents, drawings and blueprints in the imperial household archives. The research clarified that Dr. Katayama had the concept that combines Japanese, European and American art, specifically, he used Japanese motifs such as the chrysanthemum, which is the imperial crest, and Japanese armor, into the sculptures designed by the French decorators.

研究分野：日本近代建築史、文化財保存学

キーワード：旧東宮御所(迎賓館赤坂離宮) 造営事業 フランス人装飾家 日本趣味

1. 研究開始当初の背景

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）は、皇太子明宮嘉仁親王（後の大正天皇）のための住居として、明治42年に竣工した宮殿建築である。旧東宮御所の既往の研究としては、小野木重勝による『明治洋風宮廷建築』（相模書房、1983）等の一連の研究、鈴木博之監修『皇室建築』（建築画報社、2005）、小沢朝江『明治の皇室建築』（吉川弘文館、2008）、児島由美子「赤坂離宮の室内装飾の調達・製作実態」

（『日本建築学会計画系論文集』第603号、pp.183-189、2006）といった、多くの重要な研究がなされている。これらの研究は、宮内庁所蔵の『東宮御所御造営誌』、『東宮御所御写真帖』と一部の工事記録、図面を資料としたものであり、建設経緯や意匠の特徴について明らかにしたものであるが、未公開の資料も多く、造営事業の全体について設計経緯や施工の実態を明らかにしたのではない。

そのような状況を大きく変えるものとして、平成23年4月1日施行の「公文書等の管理に関する法律」により設置された宮内公文書館において、新たに旧東宮御所の造営時期全体を通じた設計図書、図面、造営期間全体にわたる会計書類が公開され、これらの新資料の分析によって、設計の過程や外国からの輸入の詳細を含めた建設事業の詳細を明らかにすることが可能となった。

研究代表者は新資料を利用し、「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の天井絵画について」（日本建築学会大会、平成25年度）において、室内装飾の重要な要素でありながら、これまで詳細が不明であった天井絵画について、フランスでの購入先、購入時期、金額、輸送の方法と建物への貼り込みの施工手法といった詳細を明らかにし、天井絵画が室内装飾の一環として認識されていたことを明らかにした。また「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の室内意匠及び家具調度品の研究-その施工・製作の実態と日本近代建築界の発展に果たした役割」（住宅総合研究財団助成研究、平成24年度、研究代表者・小泉和子）に研究分担者として参加し、花鳥の間（大食堂）、朝日の間（第一客室）といった主要室の内装の施工について、工事体制、施工者、手法についてまで明らかにした。

旧東宮御所の造営に際して、室内装飾・家具調度品は、その研究と発注のために片山が明治36年に渡欧し、主にフランスから輸入されたことは知られていたが、購入先や設計過程、選択基準等の詳細については明らかにされてこなかった。研究代表者は、これまでの研究の過程で、主にフランスから輸入された装飾の施工の実態と、その装飾内容が日本人技師により変更されていることを確認し、新資料の中にはフランスから輸入されたと考えられるデザイン画が多数存在することを発見したことから、これまで詳細が明らかにされていなかった旧東宮御所造営とフランスとの関わりを明らかにする必要性を認

識するに至った。

2. 研究の目的

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）は、明治42年に竣工した宮殿建築であり、造営にあたり、宮内省には明治31年に東宮御所御造営局が設置され、内匠寮技監・片山東熊が建設事業を統括した。明治期における我が国最大の記念建築であり、当時先端の建築技術や工芸美術の粋を集成した極めて優秀な建築として、平成21年に明治以降の建築として初の国宝に指定された。本研究は、宮内庁宮内公文書館で新たに公開された設計図書、図面、造営時期全体にわたる会計資料の分析により、これまで明らかにされていなかったフランス人室内装飾家の旧東宮御所造営への関与と、本格的な西欧の建築様式の中に巧みに組み込まれた日本趣味による装飾の導入の経緯を明らかにするものである。

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）は本格的な西欧の建築様式を採用しつつ、彫刻等の装飾に我が国独自の主題が多用され意匠的に高い価値を持つが、それらの意匠の設計過程などについては、これまで明らかにされてこなかった。本研究は、宮内庁宮内公文書館で新たに公開された資料を詳細に分析することにより、造営におけるフランス人建築家の関与を明らかにし、装飾意匠の設計の具体的な手法を明らかにすることができる点に特色がある。また、フランス人室内装飾家が手掛けた同時期の建築と比較することによって、旧東宮御所独自の意匠を特定でき、設計変更を重ねた図面を分析することにより、日本趣味の装飾主題の導入された時期、経緯を明らかにできることから、東宮御所としてふさわしい装飾についての片山ら日本人技師らの理解を、その変更の過程を含めて詳細に分析することができることが極めて独創的である。本研究の成果により、旧東宮御所の装飾について、具体的な導入経緯や製作会社を含めて明らかにできることから、旧東宮御所の価値を同時代の世界の建築界の動向を踏まえて位置付け直すことが可能となる。さらに、旧東宮御所造営によってもたらされた多くの技術は、その後の日本近代建築の発展に影響を与えたことから、本研究の成果が利用され得る範囲は広い。

3. 研究の方法

旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）造営におけるフランス人室内装飾家の関与と日本趣味について明らかにするため、（1）フランス人室内装飾家による関与の特定、（2）フランス人室内装飾家に関する資料の収集・分析、類似事例の調査、（3）主要各室における室内装飾の特徴と日本趣味の導入の調査、をおこなう。

研究資料としては、主に宮内庁宮内公文書館で新たに公開された設計図書、図面、会計文書を用いるほか、東京都立中央図書館木子

文庫等の関連する他の資料も併せて用い、当時の新聞・雑誌等の記載も悉皆調査する。フランス人室内装飾家の資料が所蔵され、類似事例のあるパリでの調査をおこない、その際には、それぞれ現地で関連する研究を進めている研究協力者の協力を得る。国内の片山東熊、宮内省内匠寮の技師が関与した他の建築の装飾についても調査する。

4. 研究成果

本研究では、宮内庁宮内公文書館で新たに公開された資料を用い、フルディノワ、エンシエルをフランス人室内装飾家と認識し、その旧東宮御所造営への関与を明らかにするとともに、日本趣味による装飾の導入の経緯と意図を明らかにした。研究方法に示した各項目について、次のような成果を得た。

(1) フランス人室内装飾家による関与の特定

宮内公文書館所蔵の造営期の会計文書『臨時費東宮御所建築費』には、建設工事の発注のための工事仕様書や職人の工費のほか、外国に注文した室内装飾品購入の領収書や業者とのやり取りの書類が含まれている。本研究では、これらを悉皆調査した。これまで不明であった発注の内容や、室内装飾品の製作会社の詳細を明らかにすることができた。また、フランス人室内装飾家の関与した部屋、装飾部分を明らかにした。また、『東宮御所御造営洋館図面』は、階上、階下、地下、一般、鉄骨、煙突、外側、電気、外国注文、沿革に分類された詳細図面、合計7,883枚であり、そのうち、外国注文に関わる図面類から、フランス人室内装飾家が関与したと考えられる図面の特定を試みた。会計文書との整合性を確認しながら、その内容や意匠の特徴についても分析した結果、主要な部屋について、フランス人装飾家が関与したかどうか不明であった図面について、会計文書と記述内容が一致することが確認でき、フランス人装飾家による図面であることが特定できた。

(2) フランス人室内装飾家に関する資料の収集・分析、類似事例の調査

これまでの調査で、アンリ・フルディノワ (Henri Fourdinois)、ジョルジュ・エンシエル (Georges Hoentschel) の2名のフランス人が、室内装飾の設計や購入に関与していたことを確認している。フルディノワは、造営事業への貢献を理由として、外国人として唯一、勲五等旭日章を叙勲されているが、既往の研究では家具との関わりのみが認識されている。本研究では、フルディノワの関与した装飾内容を特定し、室内装飾家としての役割を確定した。エンシエルについては、平成24年にニューヨークのメトロポリタン・ミュージアムで彼の寄贈したコレクションを中心とした展覧会が開催され、論文集“Salvaging the Past: Georges Hoentschel and French Decorative Arts from The Metropolitan Museum of Art” (Danielle



図1. 旧東宮御所正面外観
(『東宮御所御写真帖』宮内公文書館所蔵)



図2. 彩鸞の間(『東宮御所写真帖』宮内公文書館所蔵)

Kisluk-Grosheide, Deborah L. Krohn, and Ulrich Leben, *The Bard Graduate Center* 他, 2012) が出版されているが、日本の東宮御所への関与については詳細は明らかではなかった。フルディノワ、エンシエルが中心となり活躍した室内装飾会社についての資料は、パリ装飾芸術美術館に寄贈されている。その他、パリの公文書館等に所在するフルディノワ、エンシエルの当時のカタログ、売却リスト等について、パリ在住の研究協力者である野口沢子が収集、分析を行った。その結果、東宮御所への関与が明確になるとともに、これまで知られていなかった霞ヶ関離宮への彼らによる家具納入も明らかになり、フランス人装飾家の日本の宮廷建築への関与がより明確になった。

(3) 主要各室における室内装飾の特徴と日本趣味の導入の調査

宮内公文書館所蔵の設計・施工図面類を中心に分析し、フランス人室内装飾家の関与があると考えられる、朝日の間、羽衣の間、花鳥の間、彩鸞の間等の、主要な各部屋について、編年順に図面を整理し、意匠の変遷を部屋ごとに調査を行った。調査には、旧東宮御所の造営に携わった木子幸三郎の資料が含まれる東京都立中央図書館木子文庫所蔵も利用し、重要な資料を確認することができた。研究を進める中で、室内装飾のみではなく、建物の正面外観の装飾や正門にもフランス人装飾家の関与と日本趣味の導入が顕著にみられることを発見し、研究対象を外観装飾に拡大し、分析を行った。また、片山、宮内



図3. 宮内公文書館所蔵資料に含まれるフランス人装飾家による彩色展開図

省内匠寮技師による同時期の他の作品である、東京国立博物館表慶館、京都国立博物館本館、竹田宮邸の装飾についても調査し、日本趣味の装飾の導入手法などを分析し、比較の対象とした。外観装飾と主要な室内について、実際に実現した室内装飾、フランス人室内装飾家による当初のデザイン、日本人技師による設計変更の過程を比較分析することにより、本格的な西欧の建築様式の中に巧みに組み込まれた日本趣味による装飾の導入の経緯を明らかにし、特に外観装飾、正門と主要室の一室である彩鸞の間については、その内容をまとめ、学会への論文発表を行った。

以上のような調査と考察を経て、旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の造営におけるフランス人室内装飾家の関与と日本趣味について、以下のことを明らかにした。

旧東宮御所造営において、外国人として唯一叙勲されたアンリ・フルディノワの役割を検証することによって、室内装飾全般に関わる装飾家としての役割が明らかになった。さらに、初期の段階では同じくフランス人装飾家であるジョルジュ・エンシェルが関与し、正面外観、朝日の間といった重要な部分の装飾に関与していたことが明らかになった。彼らはフランスのみではなく各国の上流邸宅建設において、18世紀を中心とした装飾コレクションをもとに室内装飾を設計製作していた。

正門については、フランス製であることのみがこれまで明らかであったが、錬鉄製青銅飾付の正門と左右小門までがフランスのシュワルツ社で製作され、輸入されたものであること、正門の製作にあたり、日本側から要望を出し、取引のある少なくとも二社から複数の案を提出させた上で選んだと考えられること、国内で製作可能な部分は国内で製作したことが明らかになった。

主要な部屋である彩鸞の間については、「沿革之部」に見られる装飾案は、片山らによる初期の装飾案と考えられること、「外設ノ部」の彩色展開図はフランス人装飾家から

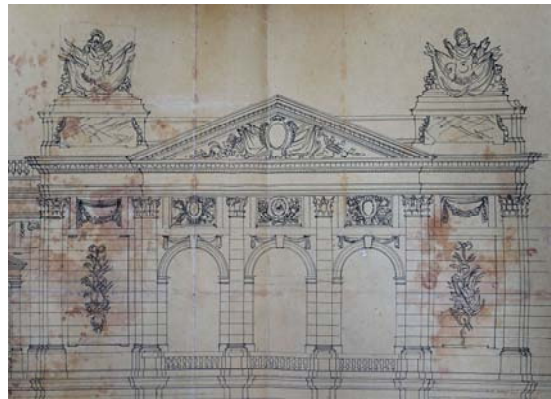


図4. 『東宮御所御造営洋館図面40』「外設一一九号・外部彫刻模様」（宮内公文書館所蔵）に含まれる装飾配置図には現在甲冑となっている部分が西洋の騎士のモチーフである



図5. 『東宮御所御造営洋館図面1』「階上第一号室」に含まれる彩鸞の間扉上装飾の詳細図（部分）日本の甲冑のモチーフが見られる。

の装飾模型購入に対応した図面であること、施工時に御造営局によって装飾が変更され、日本趣味の導入とともに西洋の様式への深い理解も窺われること、が明らかになった。

「外設」図面は、フランス人装飾家からの室内装飾模型購入に対応する図面であること、装飾家の変更によってもデザインは大きく変更されず継続性を保っていたと考えられることが明らかになった。フランス人装飾家に装飾案を依頼した時期に、第二客室にアンピール様式を用いることや、鸞の使用が決定されたと考えられる。片山は明治36年1月から12月までフランスに滞在し、装飾家と直接のやり取りを行ったと考えられるが、それを示す資料は未発見である。

「階上ノ部」には、施工時の各種図面や装飾の変更図面などが多数含まれている。「外設」の彩色展開図と竣工時の装飾の変更点は、主に扉上、鏡上の彫刻モチーフの追加に見られる。「階上ノ部」のこれらの変更を示す図面には、明治38年から39年にかけての日付がある。片山を含む複数の印が押されているが、特に図面のタイトルや日付に近い位置に木子幸三郎の印が単独で押されていることから、木子が図面の作成を担当したと考えられる。モチーフの変更内容は、「外設」では3か所の扉上に「騎士とライオン」のモチーフが配されていたのみであったが、新たに鏡上

部のアーチを矩形の彫刻装飾板に変更し、入り口側はペガサスと壺が、窓側は杯と燭台が配されている。3か所の扉上についても左右は「甲冑とライオン」に変更され、中央は王冠や勲章、グリフォンを日章旗の前に配置したモチーフに変更された。これらの変更には、写実的な甲冑や日章旗に日本趣味の導入が見られるのと同時に、棕櫚やグリフォンを用いるなど、アンピール様式への深い理解の様子が窺える。

正面外観装飾についての調査の結果、明治32年の鉄骨・暖房設備の調査・発注のための米国出張時において、片山は装飾の基本的構成を決定していたものの、それを完成形とは認識しておらず、それ以降も変更する意思を持ち、日・欧・米の美術を組み合わせる意図を持っていたこと、装飾家という役割に注目していたことを明らかにした。さらに、正面外観装飾の設計過程を示す立面図案を発見し、菊花紋章、甲冑といった日本趣味の意匠を正面外観装飾に用いることが、造営当初から意図されていたことを明らかにした。

正面外観装飾の多くは、その意匠案を模型としてフランス人装飾家ジョルジュ・エンシェルから購入したこと、これまで室内装飾のみと考えられていたフランスからの輸入が外観装飾にも及んでいること、また、画家の黒田清輝が仏国出張時に騎士像の彫刻模型の購入をおこなったことを明らかにした。

実際の装飾との比較から、フランス人装飾家、彫刻家の提案を受けた外観の装飾意匠に、最終案では日本趣味の意匠が導入されたこと、これらの日本趣味の装飾の導入は日・欧・米の美術の粋を組み合わせるといふ片山の基本方針を反映したものと考えられること、その手法は、フランス人装飾家の提案した西洋の装飾の中に日本趣味の意匠を挿入するものであったことを明らかにした。

本研究を通じて、新たに公開された資料から、旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の設計過程に関する多くの重要な資料を発見することができたが、フランス人装飾家への依頼の経緯、日本人技師とフランス人装飾家のやりとり、設計変更の詳細な時期など不明な点も多い。今後より一層の調査を進め、詳細を明らかにしていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計9件）

1. 平賀あまな、野口沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の室内装飾の設計過程—彩鸞の間について—」、査読無、『日本建築学会大会学術講演梗概集』（建築歴史・意匠）、pp. 229-230（2017）
2. 鈴嶋 富士子、浅香 利明、平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）における保存修復の取り組み」、ポスター発表、査読有、『文化財保存修復学会第39回大会梗概集』（2017）
3. 平賀あまな、野口 沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の正面外観装飾の設計過程」、

査読有、『日本建築学会計画系論文集』Vol. 81, No. 726, pp. 1773-1782（2016）

4. 平賀あまな、野口沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）正門の設計過程」、査読無、『日本建築学会大会学術講演梗概集』（建築歴史・意匠）、pp. 881-882（2016）
5. 野口沢子、平賀あまな「有栖川宮邸のフランス輸入家具・調度」、査読無、『日本建築学会大会学術講演梗概集』（建築歴史・意匠）、pp. 879-880（2016）
6. 平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の「住居」としての利用」、査読有、『家具道具室内史』No. 8、pp. 135-141（2016）
7. 平賀あまな、野口沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の天井画」、査読無、『家具道具室内史学会』No. 7, pp. 6-20（2015）
8. 平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の大正・昭和戦前期の利用について」、査読無、『家具道具室内史』第7号、pp. 110-120、（2015）
9. 平賀あまな、野口沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）造営へのフランス人装飾家の関与」、査読無、『日本建築学会大会学術講演梗概集』（建築歴史・意匠）、pp701-702、（2015）

〔学会発表〕（計3件）

1. 平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）の室内装飾の設計過程—彩鸞の間について—」、日本建築学会大会学術講演、2017
2. 平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）正門の設計過程」、日本建築学会大会学術講演、2016
3. 平賀あまな「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）造営へのフランス人装飾家の関与」、日本建築学会大会学術講演、2015

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平賀あまな（HIRAGA, Amana）

東京工業大学・環境・社会理工学院・特任准教授

研究者番号：90436270

(2) 研究協力者

野口沢子（NOGUCHI, Sawako）

美術史家（パリ在住）